

1、P・ミシュラ「西側はなぜグローバルの宣伝戦に負けているのか」

自国の帝国主義的な過去を直視しないから、プーチンやその他のデマゴーグに付け入られるのだ。インドや発展途上国が米国や同盟国のウクライナ戦争支援に同調しない理由を、米国の通信社ブルーバークの記者が明かしている。

2、イエン・モー「台湾は平和を望む」

「第二のウクライナになるのは御免被る」。台湾危機を煽る米国や西側の見方は不正確で偽善的だ。台湾の現実と人びとの願いを知ってほしいと訴えている。

3、B・S・サントス「欧州は今を乗り切れるか」

「古くて新しい亡霊がヨーロッパ中を徘徊している」。ウクライナ危機で増幅する極右ファシズムの影と民主リベラル勢力の混迷を憂え、ヨーロッパは本当の危機を乗り越えられるか、と訴える文明論者の警告。

4、聴瀧 弘「研究メモ＝レーニンとウクライナ」

レーニンは、十月革命前はウクライナの民族自決権を承認していたが、その後突然「併合主義」に豹変し、ウクライナに侵攻したことに問題の根源があるとする論調もある。何が正確なのだろうか。ロシア史研究家の分析。

5、鈴木 頌「ウクライナ戦争開始一周年に思う」

この間、明らかになった事実から戦争を終わらせる前提は何か、これからどんな時代が予感できるのか、を考える。ウクライナ危機と世論の混迷のなかに、AALA 運動の未来が見える。日本 AALA 常任理事のブログからの転載です。